



2019 フラメンコ マイベスト 座談会

2019 MY BEST FLAMENCO TALK

2019年も大小さまざまな収穫のあった フラメンコ公演&ライブを振り返り、 ワクワクする未来を提案します！

2019年12月21日・パセオ編集部にて収録

【出席者／全7名】

石井 拓人(ライター)

若林 作絵(ライター)

白井 盛雄(ライター)

堀 慎二郎(ライター)

西田 昌市(タブラオ管理人)

井口 由美子(編集部／記事構成)

小山 雄二(本誌編集長／司会と文責)

小山 さあ、では2019年も昨年同様、できるだけ村度抜きの本音でやり合っ
てまいりましょう。今回はカサ・アルテ
イスタや青山トロやラ・バリーカの管
理人さんでもある西田昌市さん、そし
てウェブや本誌に『TABLAO FAN!』
を連載中の堀慎二郎(S.Hori)さんが初
登場です。じゃあ早速、一人につき1
点、それぞれの2019マイベストの発
表です！

若林 石井智子『コハクノモリ』です。
テーマ、照明、舞台装置、構成などの
演出、音楽・舞踊・演劇のクオリティな
ど総合力でマイベストに選びました。

小山 難解なロルカをぐっと身近にし
たね。石井智子の構想力が見事だった。

若林 そうなんです。舞台の完成度の
高さに、これまで積み上げてきたノウ
ハウの膨大さがにじみ出ている。演劇
との共演は、無言劇であるフラメンコ
の限界をある意味で認めた結果だと思
うんですね。その懐の深さ、アートの
境界を容易に乗り越えていく明るさ。
演劇側の実力が高くて芝居の迫力に圧
倒されましたが、それをも包み込む石
井智子の意志、フラメンコの公演とし
て格調が高いこと、提示されたロルカ
の世界観も新しく心躍ったのが選出

の理由です。

井口 演劇人の言葉とフラメンコ舞踊
との協演の厚みによって、ロルカの世
界観を発信したいという意欲が伝わり
ます。



石井智子『コハクノモリ』

小山 2019年10月の『大沼由紀舞踊
公演／Magnetismo』がマイベストで
す。もう十数年彼女のリサイタルを追
っかけてきたけど、今回は川端康成『雪
国』の冒頭のようにスカッと突き抜け
た、スペインでも諸外国でもそのまま
持って行けるクオリティのステージで
した。彼女はいわゆるプロが観たがる
プロだけど、今回のステージの吹っ切
れ方が、つまり頭だけで創らない方向
性が、彼女の潜在能力を極限まで発揮
させたという印象。

井口 大沼さんの、フラメンコを聴く
集中力が尋常じゃなかった。いま生ま
れた瞬間の音への反応の緻密さと広が

りが凄まじかったんです。

小山 具体的には、ムイフラメンコな
存在感と即興性、サパテアードの音色
とリズムで発揮される繊細にして逞し
い音楽性、休憩なし90分に凝縮され
る高い密度の一瞬もブレない求心性。
それと業界ナンバーワンの構成演出力
を発揮する佐藤浩希をアドバイザーに
起用した彼女の開放性が、今回の大成
功の縁の下の要因だって感じたよ。



大沼由紀『Magnetismo』

堀 僕のマイベストは4月の二村広美
さんのソロライブです。何がいいって、
彼女の抜群の集中力でグイグイ引き込
まれたことです。フラメンコに対する
真摯な想い、フラメンコとともにあ
った自分や、目の前のお客さんに対する
純な想いがすごく感じられて、もう
神々しいほどでした。Facebookや「ミ
ルフラ！」でも記事にしましたが、見
ていた僕は右目でファインダーをのぞ
き左目で涙を流すという前代未聞の状
態になっていました(笑)。

白井 二村広美さんの踊りから、彼女
の気持ちがダイレクトに伝わってきます。

井口 生々しい感じ？

白井 そう、まだ完成されていない、
創っている途上の生々しさがいい。技
術的なものに偏って完成した人は、で
きたての料理をそのまま出して、とき
には冷めてしまっていることもある。

西田 一部の完成している人の中では、
いつも完成した演技されるということ
もありますよね。フラメンコの発展を
考える時、経験の長い人、トップレ
ベルにいる人にこそ、変化を続けて欲
しいと思います。それが業界全体のレ
ベルアップになるから。

小山 完成の域って凄いいことだけど、

守りに入っちゃうと、客席からそれが透けて見えちゃうからなあ。

堀 そうですね。タブラオのソロライブは、踊り手さんのその瞬間のその人そのものがすべて出てくるところが凄くいいと思っているんです。成長段階もすべて。テーマ性、物語性を全面に出す大ホール公演もいいですが、舞台が間近のタブラオで踊り手さん自身、踊り手さんそのものを感じながら見るのもとても楽しいこと。そういうライブを見ると、フラメンコってやっぱり「人」なんだなと思うし、魅力的な人が踊るから踊りもライブも魅力的になる。フラメンコに対して強い想いを持って、それを舞台に出す技術を持った人がもっと増えてくれればいいなと思っています。



二村広美

©堀慎二郎

白井 私のマイベストは、横須賀でのフラメンコ『すかふらフェス!』です。『すかふらフェス!』は、4つのフラメンコのチームがそれぞれ1時間ほどのライブをしました。

井口 屋良有子さん中心のメンバーもすごかったそうですね!

白井 そうなんです。2019年の新人公演で奨励賞を受賞した津幡有紀さんや国際コンクールで優勝経験がある牛田裕衣さん、この『すかふらフェス!』のまとめ役の畑中美里さんらもチームとして踊りました。もともと映画館だったライブハウスは音響や照明もしっかりしていて、なによりゆったりとした客席で、食べたり飲んだりおしゃべりしながらのフラメンコは楽しかったですね。

小山 個人ではどう?

白井 実は最後までパセオライブの井上圭子さんと迷いました。パセオの公演忘備録に「井上圭子の踊りには愛嬌がある」と書きました。夏目漱石は、「愛

嬌は自分より強いものを倒す柔らかい武器である」といっているけれど、どうやらじわじわと井上圭子さんの愛嬌にやられたようです。彼女の踊りには、柔らかくて強靱な個性があります。

井口 井上さんの美しさには人間的なたくましいエロスを感じます。



『すかふらフェス!』

石井 私は『Israel & イスラエル & YCAM』です。AIと共演し製作過程を含む記録も公開し技術的な話もなされ実に刺激的ですし、最前線を垣間見たという経験は何物にも代え難いです。またこれが山口県のYCAMという首都圏から遠く離れた地で企画され実現したという事実、フラメンコの底辺拡大、一般への浸透というヒントもあると思います。地方でフラメンコ普及に尽力している人への応援という意味でも、主催のYCAMにエールを送りたいです。

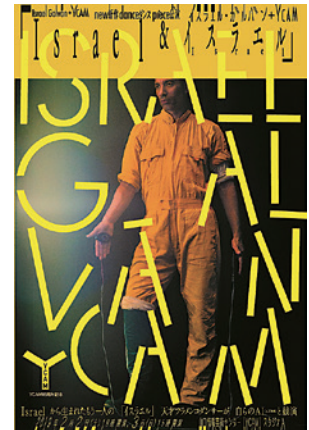
小山 拓さん、わざわざ山口まで行ったんだよね。

石井 フラメンコ関係の方が大半で知った方も多くいらっしゃいました。イスラエルの実験的な挑戦はすごく刺激になるから、追っかけていきたいですね。

井口 ああ、やっぱり行くんだって!

石井 AIという素材を共演者として選ぶ先進性とイスラエルの好きなものをちりばめた構造はフラメンコの解体再構成を新たな次元で行なっていて、それを日本で初演、フランスで再演というのはフラメンコの歴史の中でも画期的です。再演は物理的に難しいでしょうが、この先も進化していくAIイスラエルを定期的に見たいものです。一過性の話題作りではないYCAMという先端技術へのアプローチを多角的

に模索し提供している機関への期待も込め、今後の展開を長い目で見て行きたいです。



イスラエル・ガルバン
『Israel & イスラエル』

井口 私は、エンリケ坂井さんと迷ったんですけど、今年のマイベストはアルテイソレラにしました。エンリケ坂井さんが復刻しているCD『グラン・クロニカ・デル・カンテ』が今年25巻まで出たので、その功績も考えたのですが、1年を通して様々な活躍したアルテイソレラに。公演に対してだけではなく、舞踊団として、フラメンコはもとより、フラメンコ以外の多様な観客、他ジャンルのアーティストをいやおうなくフラメンコに巻き込んでいく圧倒的熱量の2019年全体の舞台活動に対してです。

小山 うん、そういうトータルではアルテイソレラがダントツだったね。

井口 『牛女』東京公演は、もとは原作者、小川未明の故郷、上越からの依頼で創られたもので、文学との融合がありました。『琥珀』は直球のどフラメンコで、ヘレスの名人たちと単に伝統的なフラメンコの披露には留まらない、この瞬間の対話で、爆発的なフラメンコの魅力を生み出す舞台でした。デスマード『悠久に遊ぶ』では邦楽器奏者との協演、ただのセッションではなく、国際的な和楽器奏者がフラメンコのコンパスを駆使して奏で踊るその求心力が凄まじい。またフラメンコ以外にも、宝塚歌劇やミュージカルや歌舞伎にフラメンコを浸透させました。彼らをそこまで引きずり込む、佐藤浩希さんの狂気には驚きしかありません。

小山 『悠久に遊ぶ』のクオリティに

は驚いた。2回観た大沼由紀が辛口言
ってたよ、「凄いけど、もっと行ける
はず」って。完璧だけど、さらにその
奥が観たいっていう厳しい突っ込み
(笑)

若林 大沼さんが良しとしないのは、
きっと褒め言葉ですね。

井口 もっと可能性があるということ。



アルテイスレラ「琥珀」

西田 ひとつに絞るのは大変でしたが、
永田健さんの『日本に恋した、フラメ
ンコ』の全国ツアー全投を私のマイベ
ストにしたいです。

小山 おっ、新鮮な着目、この座談会
ならではのセレクトだね。

井口 視野が広いですね。和服や日
本の名勝と一緒に紹介することで、世
界に発信することを想定している。

西田 そうですね、英語やスペイン語
の説明を使って、YouTubeを使ったと
いうのもいいです。再生回数はじわじ
わ後になって増えていきますから。

白井 何かきっかけがあれば特にね。

西田 そうですね。そのきっかけをイ
ンターネット上に作ったというのがひ
とつの意義。ユーザーとしての
公益性も高い。これをメーリングリス
トを使って、月に一回程度のペースで
報告もされていました。そのこまめさ
もいい。出資を募るのもクラウドファ
ウンディングを使っています。

堀 いろいろな方法でフラメンコを広
げる道を作られていますね。

西田 そのとおりです。奨励賞は取っ
たけど次にどうしていくのか？ フラ
メンコの教室を長年経営しているがこ
れからどうしていくべきか？ 自分を
どう発信していくのか？など、フラメ
ンコに将来どう関わっていくのか悩ん

でいる人たちへ、ひとつの指針を示さ
れました。何といても企画者の永田
健さんが、自分のことは後回しにして、
一年間日本全国で色々な人を巻き込み
フラメンコのすそ野拡大に貢献された
ことがマイベストの理由です。



『恋フラ』(前列中央/永田健) ©館林佳史

小山 うわっ、七名が七名もの見事
にバラバラなプレゼンをありがと
うございます。このマイベスト企画は
「視点の多様性」が主要眼目のひとつ
なので、たいへん歓迎すべき事態です。
では、大賞選考はあとに回し、続いて
「わたしの部門賞」発表です。

わたしの 部門賞

小山 アルテイスレラ、沖仁、入交恒
子、鈴木敬子、平富恵、石井智子など
に代表される脂の乗り切ったベテラン
陣の舞台をたくさん観ましたが、どれ
が今回マイベストに選ばれても異議ナ
シです。2019年は人気実力派の劇場
公演が異様とも云えるほど充実してい
て、今挙げた公演はすべて「わたしの
優秀テアトロ賞」です。優れたアーテ
イストが己のヴィジョンを実現させる
想いの深さを、改めて思い知らされま
した。色褪せることのない永いスパン
の信念をまっとうされている。このご
時世、尋常なことではないです。一度き
りの人生、やはり継続は力と痛感しま
した。

堀 ライヴでは鎌倉・建長寺の滝沢
さんの舞踊生活40周年記念リサイタル
に「人生が見える賞」を。彼女が生
きてきた40年の時、その中で生まれ
た感情のうねりを感じられて、フラメ
ンコって本当に人生が投影されるんだ
なと思いました。個人では「飛躍賞」

を内田好美さんに。第二回全日本フラ
メンココンクールで賞を取り、新人公
演でも奨励賞を取りましたね。2019
年に2つも賞を取ったわけですが、そ
れだけの力量がある方で、新人公演の
シギリージャでカンテのモイが悲哀た
っぷりの声を絞り出した時、好美さん
が回転しながら手で顔を隠して、まさ
に悲しそうに、苦しそうに身体をか
めたのをはつきり覚えています。感性
の豊かさと表現力に感心させられるし、
これからの活躍に期待しています。

若林 「濃密賞」として、カサ・アルテ
イスタの木曜企画です。打ち合わせな
し、リハーサルなしのフラメンコに挑
む心意気に一票。これまでもスペイン
で長期間修業された方、スペイン人ア
ーティストたちによって行われてきた
ものですが、そういう本来のフラメン
コを志向する覚悟・心意気が潔い上に、
ライブはスリリングで濃厚で目が離せ
ません。それと「新人賞」として、西
田昌市さんと掘慎二郎さん。フラメン
コの外側からの視点を持つ人材の登場
に期待の一票です。お2人がもたらす
視点は、「エンターテインメントとし
てのフラメンコの楽しみ方」です。ス
페인レベルのフラメンコ、つまり文
化の先鋭化とすそ野の拡大は互いに補
完関係にあり、同時に行われてこそ実
現するものではないでしょうか。

白井 「わたしのカンテ部門賞」は、
パセオライブで、エンリケ坂井さんが
編纂する『グラン・クロニカ・デル・カ
ンテ』の曲を歌った今枝友加さん。ス
페인人にとっても百年以上昔の曲は
外国の曲のようなものだと思います。
その古い曲に新しい命を吹き込むよう
なカンテソロに感動しました。そして
古いフラメンコの曲は、未来のフラメ
ンコにとって宝の山であることを教え
られました。「わたしのギター部門賞」
は、エンリケ坂井さんのパセオライブ
でのギターソロのタンギージョ。まる
で遠くからやってくるような音。カデ
イスのフェスティバルの乱痴気騒ぎが
見えるようで、この世のものとは思え
ないような迫力だった。思わずこれは
エンリケ坂井さんの「遺書」ではない
かと感じました。

西田 「すそ野を広げる貢献賞」として、上藪洋子さん・須田隆久さんの親しみやすいフラメンコショー、鈴木眞澄さんのYouTube『ますみチャンネル』、スペインからフラメンコを発信する三枝雄輔さんの『raton flamenco』、SIROCOさんのマスコミをも巻き込む大胆な展開、フラメンコの見る楽しさを発信するS.Horiさんのミルフラ、舞踊手のベストショットを配信するFaceBookのタブラオフラメンコ、夏の新人公演に出演されたすべての人たち。そして「入門～初心者を魅了し目的を与えた賞」として、リハ無しでタブラオライブ本来の魅力に迫る「カサゲツ企画」「カサモク企画」。トップアーティストによる人間技とは思えない超越と圧巻と感動は、いつかこうなりたい！と願う練習生の良き目標となることでしょう。

石井 「カンテ賞」はLA MOECO(占部智子)。日本語で歌うフラメンコ、私でも歌える喜びがあります。「桜賞」は自画自賛ながら小田原、お城と桜とフラメンコ。「継続は力なり賞」は“救え被災地！チャリティーライブ・シリーズ”。東京、横浜で継続的に開催され、台風19号被災へのチャリティーまでやっているという心意一人が出来ることは本当に小さいかも知れない。でも、世の力になれるという事実はどこか私たちの生きる上でのバックボーンたり得るとも思えるのです。「寺フラ賞」は中田佳代子さんの盛岡ライブ。舞台はお寺で、東北にフラメンコ文化を根付かせたいという意欲をもって毎年のように企画されています。大都市圏以外での普及定着は緊急課題で、多く地方を取材したいと思うようになりました。

井口 エンリケ坂井さんに「プーロの架け橋賞」を。師の復刻CD『グラン・クロニカ・デル・カンテ』は現在25巻、スペインにも無い未来に残すべき第一級資料は世界に誇る功績。パセオ掲載の論文ではプーロフラメンコ精神の普遍性を説かれました。そして小島章司さんに「国際フラメンコ賞」を。80歳にして現在も海外の舞台に立ち、生き方そのものが普遍哲学の象徴に想え

ます。そして西田昌市さんに「未来プロデュース賞」を。幅広い一般層をフラメンコに取り込む構想を実現されています。次々と打たれる布石の勇気と行動力に敬意を表します。もうひとつ、プレミアのニューウェーブでの小林伴子さんの重厚なシギリージャが凄かった。年輪の気迫がありました。「今年のシギリージャ賞」を小林伴子さんに。

小山 うーむ、実にいろいろ出ましたねえ。頭が柔軟になってフラメンコを楽しむアンテナが磨かれるようです。ではここで2019マイベスト大賞の選考に入ります。昨年はこちらからの討論で「新宿ガルロチ」が逆転の大賞受賞となりました。

井口 はい、本命のスペイン国立バレエ団を第4コーナーで抜き去りました。

小山 今回新鮮なのは例えば拓さんのイスラエルの挑戦、西田さんの永田健さんの新しい全国普及バージョン、堀さんのタブラオソロライブへの注目。そういう斬新でシャープな切り口がおれみたいな年寄りにはいい刺激になるんだよ。だけど大賞選びは難航するねえ(笑)

井口 地味ですけど、エンリケ坂井さん監修のCD『グラン・クロニカ・デル・カンテ』は？ 今年25巻に達したので、このタイミングで功績を称えたいです。

小山 最近また売れ始めてるんだよね。

堀 原点回帰でしょうか。

白井 丁寧な解説に感動します。レトラの日本語訳もうれしい。

石井 今年リリースしたエンリケさん自身のソロアルバム『フラメンコの炎Ⅲ』も素晴らしかった。

西田 エンリケさんのような存在は他には見当たりませんね。

若林 継続力、労力に敬意を表したい。

小山 おっ、流れが一本化してきたね。

若林 公演でないフラメンコの活動に着目できるというのも、こういう場だからこそというのはありますね。

井口 スペインにも無いシリーズ、むしろ外国人だからこそ、その希少性を掬い取れるのかも知れません。

小山 赤字丸出しの地道な努力の積み上げが、今年も第4コーナーでググッ

と伸びてきた(笑)

白井 カンテは生き物のようなものかもしれません。一度消えてしまったら甦らすことは不可能。その意味でこのCDは、とても貴重な記録ですね。

石井 冊子を読むだけでも十分価値があると思うのです。1曲1曲に寄せる詳細な解説はそれだけで販売されてもいい位の充実度ですね。大好きです。

西田 エンリケさんが昔発売されたCDを買ったのですが、プログラム冊子に曲の日本語訳がついていて、昔からフラメンコを日本に浸透させようというお気持ちがあったんだなあと思わってきます。

堀 すそ野を広げよう、という時期だからこそ、源流、本筋を大切にしたいですね。

小山 おおっ、全員一致で賛成！、ってこと!?

全員 賛成!!

小山 (笑)もちろん私も賛成。それではマイベスト2019大賞はエンリケ坂井監修の復刻CDシリーズ『グラン・クロニカ・デル・カンテ』に決定いたしました!!



CD『グラン・クロニカ・デル・カンテVol.25』



エンリケ坂井

©井口由美子

わたしの 提案

小山 ではマイベスト大賞が決まったので、昨年同様後半は、フラメンコのより善い未来を願う、出席者それぞれのわたしの提案コーナーです。昨年は白井さんの提案『地元密着型フラメンコの活性化』が出席者の注目を集め、パセオ本誌でも白井さんにそのテーマによる連載『バモス!』を即始めてもらいました。さらに白井さんの10月号特集で、全国各所のフラメンコ活性化に注目しつつ、すそ野を広げるためのアイデアを提案してもらったね。今回も現実の改善を促す提案を期待しています。

堀 フラメンコというジャンルを、もっとポピュラーなものにしたいですね。曲も踊りも、誰もがとは言わなくても、多くの人が「知ってる!」というものにしていきたい。それには露出を増やして、多くの人が触れるきっかけを作らないといけないし、今のフラメンコそのものの体系もいろいろあるべきだと思うんです。深みを追求する名作映画のようなフラメンコもあれば、娯楽作品として気楽に触れられるフラメンコもある、そんなふうには、いろんな方面でフラメンコに出会うきっかけがあるという状況が必要ではないでしょうか。

井口 11月号の西田さんの論文『フラメンコ人口と収益構造の拡大』は、フラメンコ界には大きな伸びしろがあることに気づかせてくれました。そこで発見できた多くの具体的な課題、その解決に向けた試行錯誤こそが急務じゃないかって強く感じています。他方で、日本国内だけではなく、世界各国にもファンが多いことがFacebookやパセオ連載からも知ることができ、新しい時代に向けた次の一手の発見は必要だと思います。

西田 お褒めいただき恐縮です。僕も改めて整理しましたので、テーマだけ挙げてみます。「業界の活性化を促す新たなフラメンコ賞の新設」。「非フラメンコ人口を取り込み、フラメンコ界

のすそ野を拡大するためのアイデアの実践」。「パセオフラメンコの部数拡大のアイデア」。「こういうライブだったら、こういうタブラオだったら行ってみたいという基準の発見」。「埋もれた人材にも活躍してもらおうフラメンコの人材バンク構想」。以上の五つです。

石井 山口、盛岡、群馬と各地を回ってそれぞれで活動してる方が地元でフラメンコを根付かせたいと尽力しているのを見て、やはり活性化のカギは地方への拡散だろうと思うんです。首都圏は無数のライブ公演があり、その気になれば見ることは叶うわけですが、やはり普段の生活の地から出るためには二の足を踏むケースが多い。だからこそフラメンコをその地で拡げる意味は大きいです。

小山 拓さんも本業多忙な一年だったのに、よく全国を駆け回ってくれたね。

石井 逆にそういう取材が精神的な救いだったりして(笑)。ネットでの堀さんのサイト「ミルフラ!」展開に期待しつつ、ライブ告知、予約まで一つのサイトでまかなえる様な仕組みもあればと思っています。何年も前から考えているけど、具体的な仕組みとか運営はどうするか考えるとき、一個人では敷居が高く放置しています。つまるところ、もっと広く告知でき、フラメンコを気軽に見てもらえる仕組みがないと、少子高齢化であと10年もしたときに人口が極端に落ちて限界集落が増えるように、限界アートというものも出てくるのではと危惧しています。

小山 クラシック音楽の世界を始め、すでにそうした傾向は顕著だね。

石井 もう遅いかもしれませんが、展望、航海図なくして業界そのものが生き延びることは難しい状況なのは間違いありません。もちろんパセオの存続も、です。関係団体にそれを望むのが難しいなら、新たな人材がタブラオやネットで活動を始めた今年、もっと楽しい事をしたいし、期待したいし自分ももっと協力したいです。

小山 以前から西田管理人が提唱してるフラメンコのプラットフォームは、ギリ貧を回避する有力な手段だね。

白井 フラメンコを継続させるネットワークは必要ですね。急逝された間瀬弦彌さんが手塩にかけて育てた全国学生フラメンコ連盟25周年の館山フラメンコの10月号の取材を通して、大学フラメンコが、先輩たちの伝統を受け継ぎ充実していることを実感しました。限られた大学生活の時間のなかで舞台やタブラオで踊るために本気で練習することも楽しいけれど、ペーニャなどでフラメンコの仲間たちとゆるゆると楽しむ時間も経験してほしい。その経験が大学を卒業してもフラメンコを続けるきっかけになるとうれしい。そういうことを可能にする受け皿もほしいですね。

小山 うーん、やはり今年のテーマも「フラメンコのすそ野の拡大」で一致してるね。やはりこれは皆に共通する大きな危機感なんだね。拓さんの指摘にもあるように、もう手遅れなのかもしれないけど、守りに入れるほどの田畑はないのだから、耕す一手なんだね。

井口 ワクワクする提案がいっぱいで舞い上がりそうですが(笑)、掲載スペースに限りがあるため、テープ起こし責任者として論点の絞り込みを提案します!

小山 うん、論点を定めよう。西田・堀の両名もいることだし、ここは「この先のタブラオ戦術」に絞ったらどうだろ?

全員 賛成!

小山 ここ数年、有言実行の西田管理人のタブラオ展開を観てきて、20世紀末のパセオ創刊やフラメンコ協会設立の頃の業界人たちのエネルギーを想い出したんだよ。あれからすでに三十余年、そしてこの先AI革命で世の中も激変する。じっとしてればギリ貧を招き、積極的に動けば金と労力のリスクが発生する。さあ、そんな中タブラオ展開の明るい可能性って何だろ?

白井 僕がはじめてタブラオを観たときにはカンテがいませんでした。

小山 やがてカンテが入って、スペイン人も入って、日本のフラメンコは磨かれ成熟してきた。少しずつ運営も変わってきて、出演者の顔ぶれも一新し



若林作絵/ゆるゆるママさんバイレ練習生として9年間。「そろそろお母さん、夜外出していいでしょうか」と家族に宣言して、がっつり練習生にシフトした半年後、小山しゅちゃんライターとして拾われて今に至ります。



石井拓人/小田原在住の土木技術者。建築もやります、機械設備電気プログラムなんでも顔をつ込みます。面白いかな、そこが判断基準。フラメンコもマゴーズも、今一番面白い。お城と桜とフラメンコ、今年もやるよ。

た。新宿ガルロチの村松夫妻や西田管理人のリスクを恐れぬアドベンチャー展開、そして老舗エスぺランサやアルハムブラの腰の入った頑張りも続く。

西田 僕の場合は、フラメンコに投資もしましたが、それ以上にフラメンコに助けられたことが大きい。フラメンコのポテンシャルをすごく感じています。

白井 地方でフラメンコのイベントが増えてきたのは、歌い手が増えてきたことも大きいんじゃないかな。カンテのプロが増えることがフラメンコを元気にする力の一つになると思います。

西田 カンテもギターも、もっと増えて欲しいですね。

堀 舞台に出られる人が増えて層が厚くなってきましたよね。

小山 こんなに過剰供給ではタブラオが共倒れになるんじゃないかっていう意見もよく聞くんだ。でも、トータルでは新しい客層も増えているから、ネガティブオンリーの意見は危険。

若林 練習生がタブラオに出ることへの批判、それで供給過多になったという意見もありますけど、供給が多くなったからこそ、プロのライブもよりレベルアップしてきたという面はあるんじゃないですか。すそ野が広がっていくことで、頂上もより高くなっていくんですよ。

白井 否定の先に未来はないですから。

石井 ちょっと踊れるくらいの方が舞台上に立ってクオリティを下げるとか、私たちの知ってるフラメンコじゃないとかの意見、僕も凄く反感を覚えちゃった。

小山 反感なんだ。

石井 反感ですね。少年野球やサッカーと同じで、いろんな人が入ってきて、その中のほんの一握りがトップになるわけで、フラメンコも一緒じゃないですか。

小山 しろろとが踊っているからプロがライブやっても客が入らないと、50代以上の多くはそう思ってる。そのプラス面を冷静に考えると、いろんな戦術が生まれる可能性があるよね。

白井 タブラオというシステムも疲弊してきた感もある。カフェ・カンタン

テの時代から百数十年も続いていて、そろそろそれを必ず前提にしなくてもいいんじゃないかと。日本独特のフラメンコを観るシステムがあってもいい。スペインのタブラオと違っておとなしく観るとか、日本独自の雰囲気がある。これまでのタブラオにこだわらない在り方の可能性を考えるのもいいかも。

西田 新しい在り方、工夫のし甲斐がありますね。

井口 例えばソロライブ企画も増えて来た。お客様に喜ばれる企画をどう考え、実際にやってみてそれをどう次に生かしているか。現状を知りたいです。

白井 例えばMC半分、フラメンコ半分というの、フラメンコをまったく知らない人にはわかりやすくいいと思う。

小山 すそ野を広げるためにすぐ着手出来ること、すでに動き始めた西田管理人さん、どう？

ブッキング

西田 はい。タブラオってショーが無いと、ほんと何もない。人も寄り付かない。例えばカサ・アルティスタでフラメンコショーをやらない日に、スペインバルとしてお客様が来るかといったら、来ないです。

井口 料理だけじゃ来ないんですね。

西田 ブッキングが出来なかった最初の頃、セビジャーナス・ディスクをやったんですけど、それでも来なかった。ブッキングって本当に大事です。いまブッキングはどうしてるかという、ひとつはプロフェッショナルフラメンコショー。もうひとつは練習生中心のライブ。

堀 木曜日の、日本の若手トッププロとスペイン人アーティストとの完全即興の本格ライブは「カサモク」の愛称で定着してきましたね。

西田 ありがとうございます。他の曜日もプロか練習生かコンセプトを明確にして、料金も区別して、お客様にテーマを理解して選んでいただけるようにしています。

小山 つまりいろんなパターンを工夫するんだね。それがさまざまな人材を

活かすことにもつながる。なるほど、それは他のタブラオでも活用できる方策かも。

西田 そう思います。ブッキングでも、いろんな工夫の余地がまだまだあるんじゃないかって。

MC、トーク

小山 さっきMCが大事なんじゃないかっていう意見があったけど、そこらへんはどう？

西田 大賛成です。それが新しいタブラオの在り方として大事で、フラメンコってやはり知らない人の方が圧倒的に多いですから。これがシギリージャなのかソレアなのか私も分からない。ソレア・ボル・ブレリアとかティエントとか言われたらもっと分からないです(笑)。

若林 私もわからないことがあります。

西田 カンテは解らない人の方が多いから、一曲ごとにMCで意味や聴きどころの解説があれば、そこを着目して観るじゃないですか。出演者ができなければ、お店側でやります。

若林 フラメンコにはなんかしゃべっちゃいけないようなカルチャーがありますよね。MCは邪道、みたいな。

西田 ありますね。拒否するプロもいます。曲のつながりのところもフラメンコの大切な一部だから、と。

白井 間合いがね。

石井 ただ、ここは日本だから(笑)

西田 誰に何をみせるか？ 自分に酔いしれたいのか？ お客様に見せたいのか？ そこは考えたいところです。

小山 在り方は明確であって欲しいと。堀君どう？

堀 僕もそうです。やっぱり話すことで親近感湧きますし、舞台側と観客側で溝ができちゃいけませんよね。そこをつなぐのがMCだと思います。

西田 MCは絶対やった方がいいです。例えばカサ・アルティスタで、タマラさんと鶴幸子さんがCDだけで踊るショーをやったんですけど、鶴さんがしゃべりが上手で凄く盛り上げてくれた。2回目の時は3割の方々がリピートしてくれました。



白井盛雄／本誌で「バモス！」を連載しています。その取材を通してスペインのフラメンコが、日本という異国で確実に根をはって成長していることを感じています。協力していただける方を募集中です。



西田昌市／エンリケ坂井さんと同じ岐阜県出身。休みの日は朝からお酒を飲んでます。2016年春、ノベンバー・イレブンスでフラメンコと出会う。フラメンコの演者でないからこそできる、フラメンコへの貢献を続けていきたいと考えています。

小山 なるほど。若林さん、どう？

若林 ギタリストの池川寿一さんが動画をたくさんアップしていて、その中で曲解説をしているのがあるんです。

堀 実況のやつですね。

若林 そう、実況の。YouTubeで1曲全部入っているような長めの動画を選んで、即興で解説するんです。「あ、いま踊り手がギターを見ましたね、ここで合図してますね」とか。すっごく面白いです。

西田 いいですね！

若林 そういう即興のルールは、練習生も意外と解ってなくて。

小山 勉強になった？

若林 なります、なります。もしそれをタブラオで生で聞けたら、お客さんはすっごく楽しいと思います。

西田 プロ野球の解説みたいですね。

若林 たくさんじゃなくて、ピンポイントで「踊り手がこの動作をしたら、次はこうなるというところがあるので、そこに注目してください」って説明するのはアリですね。1個覚えたら、フラメンコの見方がひとつ増えるわけですよ。

堀 カンテの方、ここで声を慣らしますね、とか。

若林 池川さんの動画で、実際のライブで実況しているのもありますよ。

西田 それ面白いですね。どこに興味を持たせるかトークのセンスも大事で。教科書のお勉強みたいな話はダメ。

若林 衣装の話は？ 曲との相性とか、バタ・デ・コーラの構造(笑)とか。

小山 聞いてて年寄的には面喰う点もあるんだけど、フラメンコのプロとして舞台を楽しんでもらうためにはエンタメ磨きも必要ということか。

堀 MCのある日と無い日をちゃんと伝えていくと、お客さんも楽しむポイントがわかりやすいですね。

プログラム

石井 シャベリもそうだけど、プログラムにももう少し説明が欲しいです。フラメンコ観始めた最初の頃、プログラムが無い、説明が無い、なんでやねん！と(笑)スペイン人はそんなことや

らない、なんて聞くけど、ここは日本だし、知らない人が多いんだから。

白井 あった方が親切ですね。

西田 そこは出演者とタブラオが協力してやることだと思っています。

井口 実際にやってみた反応は？

西田 まずプログラムの裏にメンバー紹介と、今日のプログラム。メンバー紹介には受賞歴とか、好きな食べ物とか出身地とか星座とか。

井口 そこまで(笑)

西田 はい。それとなぜ今日このメンバーが集まったのかという背景。それを読むと何がいかって、終わったあとに話が弾む。それによってお客様が踊り手のことを好きになるので、win winですね。お客様だけじゃなくて出演者もうれしい。そしてショーをやっているときに、やっぱり皆さん、今何をやっているのかプログラムの裏側を見ます。踊っている曲種と、その曲の意味。そこにさっきのMC、見どころが聞けたらさらにいいでしょうね！

ポップ的要素～ロサリア

石井 すそ野を広げるという意味では、AKB劇場じゃないけど、もっとポップなフラメンコがあってもいい。

西田 ポップということ言うと、日本語のポップで踊るフラメンコができたらいいですね。例えば、盆踊りにダンシングヒーローがけっこう定番になってるじゃないですか。

石井 いいよ！ めっちゃくちゃ面白い。踊りたくなるよ。

西田 誰もが口ずさんだり、ちょっと踊れたりできる、みんな知ってる簡単な曲が欲しいですね。

堀 英語の歌なら口真似でも歌いたいですがものね。フラメンコは難しいから。

西田 ギターで言うとコードだけで弾ける曲で、誰もが入りやすいワンセットを作って、とにかく触れてもらえるという機会を作りたい。例えばサザンで一曲踊るとか。

若林 パラパラくらいの難易度で、なんとなく踊ったらカッコいい、的な。

白井 セビジャーナスは難しいから。

若林 そう、入門のセビジャーナスがこんなに難しいとは……。

小山 ひゃあ、いろいろあるもんだね(笑)そういえば、ロサリア知ってる？

石井 知ってる！ R&Bやポップス系のフラメンコでスペインで大ブレイク中。

小山 踊りはカナリースに習った本格派。南米北米、ヨーロッパでもかつてのホアキン・コルテスを超える人気。スペインの東敬子さんにさっそく特集やってもらうことにしたんだ。YouTubeでチェックしたらこりゃいける！と思ったよ。若い女性だけに共感度は高いし、来日したらガデス舞踊団や山口智子級の大ブームが起こるかも。

若林 わかりやすいですね。

小山 例えばクラブとかで、あのテイストが流行ると思うんだ。最先端のオシャレな振りを気軽に近くのフラメンコ教室で習えるとか、タブラオでもアンコールに組み込んでみるとか。

白井 観客も踊れたら楽しいですね。

小山 うん、ロサリアが2020年以降のエポックになる可能性は高いよ。

若林 ロサリアがPVで踊ってるファッションもいい。ストリート系で。

西田 服装も革命起こしたいですね。次世代の衣装に。

日本語フラメンコ

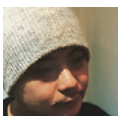
石井 あと日本語のフラメンコがもっと増えたらいいですね。

西田 賛成です。アレグリアス1曲でもいいので、日本語で歌って欲しいですね。

石井 日本語なら歌って踊れちゃうんです。MOECOのライブで群馬に行った時、おばあちゃんも孫娘も一緒に踊ってるのがよかった。フラメンコ知らなくても日本語だと自然に身体を動かせるんですね。

井口 MOECOさんの歌は、誰もがそれを歌ったときに自分の気持ちに乗せられるような言葉を選んだって。

西田 それは大事ですね。やっぱりコミュニケーションなんです。人間って意思疎通ができないと何も面白くないんです。スペイン語が分からないとやっぱり入りにくい。



堀 慎二郎/本業はフリーの編集&ライター。フラメンコは観るだけだったが、観客視点でフラメンコを楽しむサイト「ミルフラ!」を立ち上げブックキング等にも関わるようになった。鑑賞時は稀に「指先フェチ」になることがある。



井口由美子/パセオ編集部員、ライター、カメラマン、販売係、受付嬢(汗)を節操なくこなしながらフラメンコにとっぷり没れる日々。フラメンコが面白いのはつまりは人が面白いからと気付いた今はもう抜けられない。

「現状を生かしながら、新しい仕組みと新しいチームで、 すそ野の拡大のために開かれたフェアな場を創りたいんです」

——西田昌市

白井 意味が解ると感情移入できる。
小山 中田佳代子が民謡歌手の福田こうへいの『南部牛追い歌』でマルティネーテ踊ったときは、根源で響き合うあまりのハマリ具合にびっくりしたよ。
若林 話だけで泣きそう。
小山 みんな仕掛けようとするけど、もうひとつうまくいってないんだよな。
若林 そうですよ、やっぱり拒否反応もある。邪道だ、みたいな。
西田 拒否する人は本当に拒否するんですよ。びっくりするくらい。具体的には言えませんが、自分が考えるフラメンコでないフラメンコを拒否する人は少なく無いと思います。
小山 うーん、くやしいけど八割方そうじゃないか？ 俺だってアブない(笑)
白井 わかります(笑)

プラットフォーム構想

小山 さて。ここまで、タブラオ展開の可能性について語っていただいて来ましたが、もうひとつ、フラメンコのプラットフォーム創りについても、いろんな意見が聞きたいね。
西田 はい。プラットフォームについては、また次の機会にいっぱい時間をかけてやりたいです。
小山 そうだね、ぜひこのメンバーでやろうよ。堀さんのフラメンコ・サイト「ミルフラ!」の親しみやすさに可能性を感じてるんだ。ここにさらに必要なものを加えて発展させていくとか。
堀 はい、むしろこういうコンテンツを作って欲しいと希望を言っていたら着手しやすいですね。
石井 私はトライアスロンもやっていますが、例えば陸上種目のプラットフォームはうまく機能していて使いやすい。
西田 どんな運営なんですか？
石井 陸連が直接ではなく、民間がやってるんです。その方が自由度が高い。
小山 なるほど！
石井 例えばマラソンは民間が陸連とはまったく別に発展して関わっています。だから集客の方法がよく分かって

いて機能していて、そこに陸連や民間のアシックスなどが協賛していて、お互いの宣伝にもなっています。具体的にいうと、マラソンは大会案内が雑誌に有り、申し込みは専門サイトへ誘導しています。今ではそのサイトが独立して大会案内から各種大会の感想を集めてベスト大会まで選出したり、と使い勝手が良い。スポンサーも多数つき、商用ベースに乗っていると見えます。
小山 ああ、うまくいってるんだね。
石井 うまくいっています。何より、全国どこからでもレースのエントリーが出来る。使う側にとっても便利なシステムなんです。
小山 素晴らしい、何よりの普及だね。
西田 それ、やりたいです。
小山 やはり自分でリスク持って、どんどんいろんな人間と自由度高く交流してるところに人が集ってくるよね。これダメあれダメってやってると萎縮しちゃうし広がりも放棄することになっちゃう。
西田 それと、最近考えているのは、フラメンコ界に新しい顕彰の機会を創るってことなんです。例えばコンクールもそうですが、技術だけでなく、フラメンコに貢献する人や教室も顕彰していきたい。すそ野を広げるためには、フラメンコの人たちがプロフィールに書ける実績をもっと増やすことが必要だと感じているからです。
小山 ああ、公的機関などから助成金なんかを申請するとき、しかるべき機

関から顕彰された履歴は大きいからね。
西田 そうですね。そういう機関に大事なのは監査や任期がクリアな仕組み。そこに賛同する人たちと一緒にネットワークを創りたいんです。そこに人材バンクも創って、参加する人たちに目一杯活用してもらうのが望みです。
小山 そのヴィジョンが、西田管理人と呑み友になるきっかけだったよな。フラメンコの環境をもっと良くするための現実的な発想だよ。
西田 現状を生かしながら、新しい仕組みと新しいチームですそ野の拡大のために貢献していく、開かれたフェアな場を創りたいんです。
小山 というところでお開きの時間です。今回はエンリケ坂井さんの功績がマイベスト大賞になりました。フラメンコのどっしりと張った根っこが存在し、それを根底に共有しているからこそ、未来をどんだけ自由に展開させてもフラメンコの本質はびくともしないって実感できたことが頼もしいです。業界の現状分析をした上でヴィジョン・戦略を組み立てる。そこにタブラオ戦術が生まれ、プラットフォーム戦術が生まれ、その先が視えてくる。長期的展望と即効的工夫と、今日の座談会はすそ野を広げるための提案の宝庫でした。肝心なのは、これを私たちから実働していくこと。では皆してこれからお隣り焼き鳥大吉になだれ込み、活字に出来ない部分についても吠えまくりましょう(笑)!



座談会出席者
(撮影/大吉Kyoko)



小山雄二/月刊パセオフラメンコ編集長、株式会社パセオ代表取締役。パッハとフラメンコと将棋と落語と犬を愛す三代目江戸っ子。